HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「流通」と「生産」:『資本論』体系における「貨幣の資本への転化」の論理
Author(s)	降旗, 節雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 12(2), 111-136
Issue Date	1963
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31093
Type	bulletin (article)
File Information	12(2)_P111-136.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「流　通」と「生　産」

――『資本論』体系における「貨幣の資本への転化」の論理――

降　旗　節　雄

はじめに

『資本論』第1巻は「資本の生産過程」という題名をもつが，実際の「資本の生産過程」の考察は，第3篇以下においてはじめてあたえられている。第1篇においては，商品世界の貨幣の媒介による商品流通への生成がとかれ，こうして導きだされた「商品流通の……最後の産物としての貨幣」[1]の「資本へ転化」[2]する過程が第2篇において究明され，この第2篇を媒介として，マルクスは「この単純流通あるいは商品交換の部面から袂別」[3]して「資本の生産過程」の内部構造の解明にはいっていくのである。つまり第1篇で明らかにされた「商品流通」がいかにして「生産過程」をとらえて「資本の生産過程」として措定するかを究明するのが第2篇「貨幣の資本への転化」の章の役割であるといってよい。ところがこの第2篇第4章で展開されている論理の脈絡は，かならずしも一貫したものとして明確にたどりえないものをもっている。たとえばこの章の第1節「資本の一般的範式」の冒頭では次のようにいう。

「商品流通は資本の出発点である。商品生産および発展した商品流通――商業――は，そのもとで資本が成立する歴史的前提をなす。世界商業および世界市場は，16世紀において，資本の近代的生活史を開始する。商品流通の質料的内容たる相異なる諸使用価値の交換を度外視するならば，そしてこの過程の生みだす経済的諸形態のみを考察するならば，われわれは，この過程の最後の産物として貨幣を見出す。商品流通のこの最後の産物は，資本の最初の現象形態である。」[4]

「商品流通が資本の出発点」であり，「商業」が「資本の成立する歴史的前提」であるという指摘は，現実の世界史的発展における商品流通と資本制的生産との関連を明らかにしたものであり，他方「商品流通の最後の産物」としての「貨幣」が「資本の最初の現象形態である」という命題は，ここでマルクスのいうようにこの「貨幣」が「商品流通」の「特殊的諸形態のみを考察」することによってえられた結論であるかぎり，「経済的形態」規定の理論的展開過程の結果をしめしていると考えられる。つまり歴史的発展過程においても，論理的展開過程にあっても，商品流通の発展の必然的帰結として資本への進展のコースが確認されなければならないというのである。

ところが周知のように，『資本論』においては，商品世界の「商品流通」への生成をとく第1篇「商品と貨幣」においては，その展開の結果として「商品流通」に対立して自立化する「貨幣」は導きだされているが，さらにこの流通の「最後の産物」から「資本」を導きだすという手続きはとられていない。

マルクスのいうように「直接に流通部面で現象する資本の一般的範式」は「G–W–G'」[5]であるが，この「範式」が，「貨幣」範疇を結論づけた「経済的諸規定」のより一層の展開の成果として成立せしめられるのでなければ，「貨幣」から「資本」への「転化」が論証されたとはいいがたいであろう。しかし『資本論』では「商品流通の直接的形態」「W–G–W」にたいして「独自な区別のある第二の形態たる G–W–G という形態」をいきなり注)対立的に設定し，この「立入った考察」[6]をもって「貨幣の資本への転化」の理論的解明としているのである。

注)『経済学批判』では，第2章3「貨幣」において，すでに W–G–W にたいする G–W–G のもつ形態的意義についての考察がなされている。しかし『資本論』ではこの部分は全部削除されている。

ということは，「資本としての貨幣」の「流通形態」「G–W–G」の「生成」過程は不問に付されていることを意味するのであり，「貨幣の資本への転化」の論証の一環が欠落していることにほかならない。このような論理の

断絶は『資本論』体系においてどのような意味をもっているのであろうか。以下本稿では『資本論』の成立過程をたどりながらこの問題を考察する。すでにこの問題は拙稿「商品流通と貨幣」(鈴木鴻一郎編『貨幣論研究』所収)においてある程度あつかったのであるが，ここでは「流通」と「生産」とをマルクスはどのような視角から，その「資本の核心的構造」の内部に位置づけようとしたかを究明することによって，資本主義の原理論体系の内部でしめるべき両者の正しい関連を明らかにしようとするものである。

1) 『資』 第1巻153頁，青木文庫版 (2) 283頁。
2) 同　　上
3) 『資』第1巻184頁，(2) 328頁。
4) 同　153頁，(2) 283頁。
5) 同　163頁，(2) 297頁。
6) 同　154頁，(2) 284頁。

1

この問題にたいするマルクスの理論的展開を追求するためには，エンゲルスのそれ(『経済学批判大綱』)をもふくめて，マルクスの経済学研究の初期における一連の労作(『神聖家族』『哲学の貧困』『賃労働と資本』『共産党宣言』等)をまず対象とすべきであろうが，一応ここではそれを省略し，『経済学批判綱要』の考察からはじめる。というのは，一つには，それらはまだかれの「古典経済学」の批判的摂取の時期の所産であって，かれの経済学的視点が統一的に確定されたとはかならずしもいいえない側面をふくんでいるからであり，二つには，それらの諸労作でしめされたかれの独自の観点は結集されて『綱要』の内部であますところなく展開されていると思われるからである。

『綱要』の主要構成部分は，「序説」「抜萃ノート」および「経済学批判のウルテキスト断片」を除けば，「貨幣にかんする章」と「資本にかんする章の二つの章からなっている。「貨幣にかんする章」においては，基本的には「価格」「尺度としての貨幣」「流通手段」「貨幣」の順序で考察され，この最

後の貨幣は「貨幣の蓄積」つまり「蓄蔵貨幣」によって代表させられている。このような展開の後をうけて「資本」の考察にはいっていくにさいして，マルクスは移行規定として「流通から資本制生産への移行」[1]の問題を論じている。かれは，まずここで「交換価値」の「実現」という点に焦点をあわせながら，それまでに展開された単純流通にたいする貨幣の関連の仕方と比較して，資本の規定づけをおこなう。

「単純流通では，交換価値がそのものとして実現されるとはいえない。それは，つねにそれが消過する瞬間にだけ実現される。……結局，単純流通のこの四つの形態規定(*W-G-W*, *G-W*, *W-G*, *G-W-G* の4つをさす……引用者)は，二つの形態規定(*W-G* と *G-W*……引用者)に還元することができ，そしてこの二つはもちろん即自的には一致する。相違は，両者のどちらに強調，アクセントがおかれているか，二つの契機——貨幣と商品——のどちらが出発点をなすか，というにある。すなわち，商品にたいする貨幣，つまり商品の交換価値がその素材的内容(実体)とひきかえに消滅するか，あるいは貨幣にたいする商品，すなわちその内容(実体)が交換価値としてのその形態とひきかえに消滅するかである。第一のばあいには交換価値の形態が，第二のばあいにはその実体が解消され，したがって両方のばあいとも交換価値の実現は消過的である。資本においてはじめて交換価値は交換価値として措定されるが，それは，交換価値が流通で自己を維持する，つまり実体のないものになるのではなくて，つねに自分以外の実体で，諸実体の総体で自己を実現することによってであり，また自己の形態規定を失うのでもなくて，さまざまの実体のひとつひとつでその自分自身との同一性を維持することによってである。したがって交換価値は，いつも貨幣であり，またいつも商品である。それは，どんなときでも流通で一方が他方となって消滅してゆく二つの契機なのである。だがそれがこうしたものであるのは，ただそれ自体たえず更新される交換の循還であることによってである。」[2]

つまり，単純流通においておこる事態は結局 *W-G* または *G-W* に帰着するのであり，これは交換価値の実体が残って形態が消滅するか，形態が残

って実体が消滅するか，いずれにしても「交換価値の実現」としては「消過的」にすぎないのに反して，資本においては，交換価値はつねに自己を維持する，というのである。というのは，資本はそれ自身たえず商品となり，貨幣となって循還する運動体だからである。

「貨幣が流通にたいしては否定的にみずからを措定することにより，すなわち流通から遠ざかることによって達しようとしたその不滅性を，資本は，まさに流通に身をまかせるというやり方で自己を維持することによって達成する。流通にたいして前提された交換価値，あるいは流通を前提し，流通において自己を維持する交換価値としての資本は，どんなばあいでも観念的には，単純な流通にふくまれていた二つの契機のどちらででもあるばかりでなく，交互に一方の形態をとったり他方の形態をとったりする。だがもはや単純流通でのように，単に一方の契機から他方の契機に移行するのではなくて，どちらの規定にあっても，同時に反対の規定にたいする関係であり，云いかえるならば，その関係を観念的にみずからのうちにふくんでいるのである。」[3)]

さて貨幣における交換価値の自立化にたいして，資本におけるそれを，このように W と G とのたえざる交替過程にもとめるばあい当然のことながらその循還は G–W–G としてえがかれることになる。このばあい最後の G で固定化されれば，G の自立化は商品流通に外的に対立するだけの消過的なものとなるのはすでにみたとおりである。したがってこの G は，たんに G として自立化するのではなく，その内部に循還の契機を内包していなければならない。ということは，G はたんに W にたいする交換価値の「形式」として自立化しているというだけでなく，交換価値の「実体」をも内蔵していることを意味する。しかし G はあくまで G であり，交換価値の「実体」である使用価値ではないのだから，「実体」たるためには使用価値と交換できるということ，しかもたんなる使用価値との交換によっては，すでに貨幣においてみたように，その使用価値の消費のうちに価値は消滅するのだから，一定の限界をもった価値額ではなく，無限に自己増殖する価値額たることが G において措定されていなくてはならない。交換価値が「それ自体たえず更新さ

れる交換の循環」として自立化することは，かくして自己増殖する貨幣，つまり貨幣を生む貨幣として運動体となることを意味する。だから「資本が直接的交換価値および貨幣と区別され措定されている唯一の規定性は，流通において，また流通をとおして，みずからを維持し，永久化する交換価値だという規定性である」[3] ということになる。「貨幣」と区別されて，しかもこの「貨幣」を出発点とする「資本」の規定が以上のようなものであるとするならば，まずわれわれは「資本」の基本的形式を *G–W–G′* において把握する以外にないであろう。事実マルクスもこの点を確認して次のようにいう。

「資本はまず流通から，しかもその出発点としての貨幣から生ずる。流通にはいりこむとともに，またそこから自分自身にかえる貨幣は，貨幣がそこでみずからを止揚する最後の要請であることはすでにみてきた。それは同時に，資本の第一概念であり，その第一現象形態である。貨幣は，たんに流通の中に消えさるものとして，みずからを否定している。だがそれはまた，自立的に流通に対抗するものとしても，みずからを否定している。この否定がその積極的な諸規定の面から総括されたものは，資本の最初の諸素因をふくんでいる。貨幣は，資本が資本としてあらわれる最初の形態である。*G–W–W–G*。すなわち貨幣は商品と交換され，そして商品は貨幣と交換されるということである。商業の形態規定をなす，販売するための購買というこの運動，商業資本としての資本は，経済的発展のもっとも初期の状態にみいだされる。つまり交換価値そのものが内容を形成し，たんに形態であるばかりでなく，それ自身の内実でもある最初の運動である。」[4]

つまり「貨幣」が「みずからを止揚する最後の要請」「*G–W–W–G*」が「資本の第一概」，「第一現象形態」であり，これはまた「商業資本としての資本」の形式であって，ここにおいて「交換価値そのもの」が「たんに形態であるばかりでなく，それ自身の内実でもある最初の運動」を展開するというのである。かくて「商業資本は，たんに流通資本であり，そして流通資本は資本の最初の形態である」が，「いっそう発展した形態は，貨幣資本，および利幣利子，すなわち高利貸 (Wucher) である。」[5] ということになる。

ここでは「商品流通」の展開が，その「最後の産物」として「貨幣」をうみだし，この「貨幣」を「出発点」として，資本の「第一現象形態」である「商業資本としての資本」「*G–W–W–G*」が生成し，これからさらに「発展した形態」として「高利貸」が導きだされるという過程にしたがって「貨幣の資本への転化」の論理が，かなり明確にたどられているといえよう。ところが他方でマルクスはこのコースと全く異なった「貨幣」から「資本」への「移行」の過程を同時に設定しているのである。

1) 『経済学批判綱要』167頁。
2) 『綱要』171–172頁。
3) 『綱要』173頁。
4) 『綱要』164–5頁。
5) 『綱要』165頁。

2

いったん *G–W–W–G* を「貨幣」から生ずる「資本の第一概念」と規定し，「貨幣」→「商業資本」→「高利貸」というコースを規定しながら，それにつづけてマルクスは次のようにいう。

「他方では，純粋な流通のうちに存在する交換価値の単純な運動がけっして資本を実現しえないことも明らかである。それは，貨幣の引上げおよび蓄積をもたらすことができるが，貨幣がふたたび流通にはいりこむやいなや，貨幣は，消費される商品との一連の交換過程に溶けこみ，したがってその購買力がつきれば，消えさってしまうのである。同じように，貨幣の媒介により商品と交換された商品も，流通から脱して消費され，なくなってしまう。だが商品が，貨幣となって，流通にたいして自立化させられるならば，それはもはや実体のない富の一般的形態を表示するだけである。」

「貨幣または商品という両点からの過程の反復は，交換自体の諸条件のうちには措定されていない。この行為が反復されうるのは，それが完成されるまでのあいだ，すなわち交換価値の総額まで交換されるまでのあいだだけ

である。この行為は，それ自体でみずから新らたに起ることはできない。だから流通は，それ自体のうちに自己更新の原理をもっていない。更新の諸契機は，流通にとって前提されているのであって，流通自体によって措定されているのではない。」

「それ自体において考察すれば，流通は前提された両極の媒介である。だが流通はこの両極を措定しはしない。だから，やはりその諸契機のそれぞれにおいてばかりでなく，媒介の全体として，総体的な過程そのものとして媒介されねばならない。したがってその直接的存在は純粋の仮象である。それはその背後でおこなわれている過程の現象である。それはいまやその諸契機のそれぞれにおいて——商品として——貨幣として——そして両者の関係として，両者の単純な交換および流通として，否定されている。もし本来的には社会的生産の行為は，交換価値の措定として，またこの措定はさらに発展して流通として——もろもろの交換価値相互の完全に発展した運動として——現われたとすれば，いまや流通そのものが，交換価値を措定する，すなわち生産する活動にかえってくる。流通がこの活動にかえってくるということは，すなわちその基礎にかえるということである。」[1)]

さてここでしめされているように「純粋な流通」の内部における「交換価値の単純な運動」をとりあつかうということが，生産過程をまったく外部に前提し，その結果としての生産物の相互交換の過程として「流通」を把握するということであるとすれば「交換行為」の「反復」の根拠が，「流通」自体にはなく，「流通」はたんに「その背後でおこなわれている過程の現象」にすぎないことはあきらかであろう。

しかしながら「流通」と「生産」との関連は，もちろんどんな場合にもこのようなかたちで設定されているとはかぎらない。むしろ「流通」と，その発展としての「商業」は「交換価値が，まだまったく前提となっていないような生産のおこなわれている民族の内部および民族相互間でおこなわれうる」のであって，「この運動は，ただ直接の使用を目的としたかれらの民族の生産の剰余を把握するにすぎず，またわずかに民族の境界でのみおこなわれ

る」[2]のである。そしてこのような「交換価値」を「前提」としない「諸民族」の間を媒介するものとして,「貨幣」や「商業」は「生産」から自立しつつ展開し,その発展は「必然的に古代共同体の没落であり,そこから共同体への対立」[3]が導きだされることになる。このような,「流通」が「生産」に対立し,むしろ前者が後者を解体し,侵蝕しつつある時期には,「貨幣は必然的に第三の規定であらわれる」[4]のである。つまり「個体化した交換価値としての,またそれとともに富の権化としての貨幣」を「追求する」というのが,「重金(重商)主義における」「貨幣」の「規定」であり,この「規定」の貫徹が,いわゆる貨幣の「文明化作用」として,当時の基本的生産関係である共同体の解体を促進し,「近代的産業社会の発達するまえの時代」を「開始」[5]したのであった。したがって「こうした面からすれば貨幣は一般的な富の代表物として,個体化された交換価値として,富を普遍にまで拡大し,交換の範囲を全地球上におよぼす二重の手段であった。」[6]

要するに「貨幣の第三の規定」乃至「商業資本としての資本」の現実の存在形態は,「重商主義」段階における流通関係の中枢として把握する以外にはないのであって,「交換価値の完全な発展を前提し,したがって交換価値に対応する社会の組織の完全な発展を前提」[7]した場合には事態は逆転する。「交換価値と発展した流通とが前提されている近代的生産においては,一方では価格が生産を規定し,また他方では生産が価格を規定する」[8]のであって,「こんどは,生産が流通を発展した契機として前提し,そして流通を措定するところの,またたえず流通から自分自身にたちかえってはふたたび流通を措定するところのたえざる過程としてあらわれるというふうになる。したがってここでは交換価値を措定する運動は,いまやそれがもはやたんに前提された交換価値の運動,いいかえれば交換価値を形式的に価格として措定する運動であるばかりでなく,また同時にそれを前提として創造し,生産する運動であるために,ずっと複雑な形態であらわれる。ここでは生産そのものは,もはやその結果にさきだって現存している,すなわち前提されているのではなくて,これらの結果を同時にみずから生みだすものとして現われる。

だが生産はもはや，最初の段階でのように，たんに流通をみちびくものとしてばかりでなく，同時に流通を，発展した流通をその過程のうちに想定するものとして生みだすのである。」[9]

このように「流通は，ブルジョア社会の表面に直接現存するもの」[10]であり，「現存のブルジョア社会の全体においては，価格およびその流通等としてのこうした措定は，表面的な過程であって，その深部においてはまったく別の過程がおこなわれる」[11]ことになる。したがって「第三の規定における貨幣」や「商業資本としての資本」は，「その単純な規定」においてはまったく存在の余地はなくなり，これらの規定はすべて「資本の生産過程」という「その深部」の「過程」からする産業資本の運動の機構の中に吸収され，埋没され，独立の範疇としてはその自立性を否定されざるをえないことになるのである。

「価値規定自体が，社会的生産様式の一定の歴史的段階をその前提としており，それ自体それによってあたえられており，したがって歴史的な関係」であるが，「他方において，価値規定の個々の契機は，社会の歴史的生産過程の初期の段階に発展し，その成果として現われる」のであって，このようにマルクスが「商品流通」を出発点とする「交換価値の自立化」としての「貨幣」，あるいはさらにその進展としての「商業資本」や「高利貸」の運動を，独立の範疇として規定しえたのは，それが「社会的生産力の現実的発展におけるきわめて巨大な用具」[12]であったからにはほかならない。それはまさに「重金(重商)主義」段階における「富の源泉の現実の発展」[13]を推進してゆく「賢者の石」[14]として，この段階における世界史的展開の主役をなしたのであった。ところが，このような商品流通にたいする「貨幣」の「不滅性」[15]は，産業資本を支配的生産関係とする「交換価値を措定する生産の体制そのものの内部」[16]においては消滅せざるをえない。「商品流通」やその「結果」としての「貨幣」乃至「商業資本」という「経済的形態関連」は，この「体制」の内部においては「たんに表面的な形態，形式的な規定であって現実的な実体はこの規定の領域の外にあり，その実体そのものにはこの規定はすこしも

関係していない」[17] ことが暴露するのである。この「体制」の基礎上において，はじめて交換価値を維持し，増殖してゆく「実体」が，「貨幣」や「商業資本」にあるのではなく，「諸交換価値としてのその共通の実体は，それらの諸商品が対象化された労働だということ」[18] が客観的に認識されうるようになる注)。

注) マルクスは別の箇処で，産業資本内部においてはじめて労働が特殊な使用価値的制約から脱した「抽象的労働」――つまり「それの特殊の規定性にたいして絶対的に無関心ではあるが，しかしまたどのようにも規定されうる労働」[19]――となる点を強調して次のようにいっている。「たとえばギルド的，手工業的労働にあっては，資本自体がまだ狭隘固陋な形態をもち，まだまったく一定の実体に沈潜しており，したがってまだ資本そのものではないから，労働もまたまだ特殊の規定性に沈潜しており，――資本に対立するようなその労働としての総体性と抽象性をなしては現れない。……だからこの経済的関係――生産的関係の両極としての資本家と労働者がになっているところの性格――は，労働があらゆる技能的性格を喪失し，その特殊の熟練がますます抽象的なあるもの，無差別的なあるものとなり，また労働がますます純粋に抽象的な活動，純粋に機械的な，したがって無差別な，その特殊の形態はどうでもよい活動，単純に形式的な活動，あるいは同じことであるが，単純に素材的な，形態にたいして無関心な，活動一般となっていくにつれて，ますます純粋でより適切に発展したものとなる」[20]。

このことから，資本と労働との「総体」[21] 的対立という「経済的関係」の内部でしか価値実体の抽象的人間労働としての把握はなされえないことが結論づけられる。そしてまた古典派の価値把握の決定的意義についてのマルクスの評価もこの点にかかっていた。(『綱要』232頁以下参照)

だから交換価値の「貨幣」としての自立化をとくばあいには，「重金(重商)主義」段階のもとにおいて「流通と交換価値」とが「国内生産そのもの」を「変容」させながら，その「全表面」と「深部全体」[22] を「とらえ」つつある過程の理論的反映として処理してきながら，他面「流通から資本主義的生産への移行」[23] をとくばあいには一転して「それ自身の基礎の上で運動しつつあるできあがったブルジョア社会」[24] を問題にするのであって，ここでは「流通はブルジョア社会の表面に直接現存するものとしてあらわれるが，それは流通がたえず媒介されているかぎりにおいてのみである」[25] というこ

とになる。つまり，このような「できあがったブルジョア社会」の内部においては流通自身が生産過程によって媒介されて，その価値増殖の実体的基礎を与えられているのであって，「貨幣」の増大は，生産過程の拡大を前提とした資本蓄積進行の反映としてあらわれるにすぎない。だから「流通は，それ自体のうちに自己更新の原理をふくんでいない。更新の諸契機は，流通にとって前提されているのであって，流通自体によって措定されているのではない。……だからその(流通の――引用者)直接的存在は純粋の仮象である。それはその背後でおこなわれている過程の現象である」[26]という理由によって，「自己更新の原理」を「生産」による「流通」の媒介というかたちで設定し，これをもって「流通から資本主義的生産への移行」という課題を解明するマルクスの論理の展開は，流通のもつ矛盾が，それ自体の発展をとおして，生産によって基礎づけられるというのではなく，じつは流通を考察したばあいの対象と，生産を考察すべきばあいの対象とが，歴史的に異なった段階をもつ異質の再生産構造である点をその基礎にもっている。「流通はそれ自身のうちに自己更新の原理をふくんでいない」から「生産」によって，この「自己更新の原理」をその内部に設定しなければならぬという主張は，一見，資本の「弁証法的発生過程」[27]をしめすようにみえるが，じつはそうではない。それはたんに考察の対象をかえることによって，流通と生産とが相互にしめる位置乃至役割を変じてきたことを指摘しているにすぎない。したがってこのような「流通」から「生産」への「移行」の論理が，マルクスのいうように「資本が生成する現実的運動の観念的表現」[28]でありうるかどうかという問題は，このような考察対象として異なった歴史的段階をとらえるという方法が，資本家的生産様式一般の考察において，「流通」と「生産」との関連を正しくとらえる方法といえるかどうかという問題として設定しなおすことができる。

だがこの点にかんしてはマルクスは当時すでに，いわゆる「経済学批判序説」の中の「経済学の方法」という節で独自の見解をうちだしていた。そこでは例の「分析」と「上向」という二つの経済学研究の方法に関連させな

がら「単純な範疇」と「より具体的な範疇」との関連について次のようにのべている。「単純な諸範疇は，未発展な具体物が，具体的な範疇で精神的に表現されているいっそう多面的な関連または関係をまだ措定することなしに，自己を実現していたかもしれないその諸関係の表現であるということ，他方より発展した具体的なものは，同じ範疇を一つの従属的な関係として維持するということである……より単純な範疇は，より未発展な一全体の支配的諸関係を，またはより具体的な範疇で表現されているような方向へと全体が発展していくその前にすでに歴史的に実存していたいっそう発展した一全体のうちの従属的諸関係を表現することができる。そのかぎりでは，もっとも単純なものから復雑なものへと上向していく抽象的思惟の歩みは，現実的な歴史的過程に照悪するものと言えよう。」[29)]

このように「単純な範疇」の現存が，歴史的にも「より具体的な範疇」の存在に先行し，しかも後者の内部に，前者が「一つの従属的な関係」として，そのまま保持されているとすれば，まさに「単純なものから複雑なものへ」と上向する範疇の展開は，論理的進展であるとともに歴史的発展過程であると一義的に規定してよいことになる。その結果，完全に発展した資本家的生産様式を分析してえられた「単純な範疇」と，このような資本家的生産様式の歴史的生成過程にあらわれる「未発展な具体物」と対応する「単純な範疇」とは何ら差別のない同一物といわざるをえないことになる。歴史的発展と論理的展開とはこのばあい完全に一致しているといってよい。

ところが，これにつづいてマルクスは直ちにこれと全く異なる論旨を展開する。たとえば資本家的生産様式の構成要素である「貨幣」という範疇は「きわめて早くから全面的に一つの役割を演じるものであるけれども，古代ではやはり，一面的に規定された国民，すなわち商業国民にとってだけ，支配的要素としての役割があったにすぎない，そして，もっとも文化程度の高い古代であるギリシャ人やローマ人のばあいでさえ，近代ブルジョア社会で前提されているような貨幣の完全な発展は，ただ，その崩壊期に現われたにすぎない。だから，このまったく単純な範疇は，歴史的には社会のもっとも

発展した状態にならなければ，その強い発展度をもって現われない。」[30]というのである。このように「貨幣」というような「まったく単純な範疇」といえども，歴史的には資本家社会のもっとも発展した状態の内部でのみしか，完全な展開をみせないというのであって，マルクスはさらにこの点を「労働」という「単純な範疇」についても検証している。

「労働は一つのまったく単純な範疇のように見える。この一般性での——労働一般として——それの表象もまたきわめて古いものである。それにもかかわらず，経済学上この単純性で把握された『労働』は，この単純な抽象をつくりだす諸関係と同様に近代的な一範疇である。」「労働のこの例が適切にしめすことは，もっとも抽象的な諸範疇でさえも——ほかならぬその抽象のゆえに——すべての時代にたいして妥当するにかかわらず，しかもこの当の抽象という規定性の点では，やはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物であるということ，そしてその完全な妥当性は，ただこれらの諸関係にたいしてだけ，これらの諸関係の内部でだけということである。」[31]つまり「貨幣」とか「労働」という「単純な範疇」をその純粋な抽象性において把握するためには，「単純な範疇」としての完全な展開を必要とするが，それは資本家的生産様式の完全な成熟を前提として，その内部でのみ可能であるというのである。

かくて「単純な範疇」と，資本家的生産様式の生成過程乃至存在様式との関連について，マルクスには相異なる二つの見解が並存したといってよいであろう。その一つは「単純なものから複雑なものへと上向していく抽象的思惟の歩みは現実的歴史的過程に照応する」という理解であり，他の一つは「もっとも抽象的な諸範疇でさえも……その完全な妥当性は，ただこれら〈発展したブルジョア社会——引用者〉の諸関係にたいしてだけ，これらの諸関係の内部でだけという」見方である。『資本論』体系における論理的展開と，現実の歴史的発展とが照応するという命題にかんして，これまでどれほど多くの異なった解釈とそれにもとづく論争とが繰返されてきたかは，ここにふれるまでもないであろう。たとえば，いわゆる「端緒の商品」の性格にかん

してさえ，現在マルクス経済学者の間で必ずしも一義的な共通の理解が成立しているとはいいがたいのである。しかしこのことは，いまみてきたように，理論的範疇と，現実の歴史的展開との照応関係について，マルクス自身に二面的な理解が存在していたことに，その原因をもとめることができる。このような「経済学体系」の範疇についての相反する二面的理解を統一的に処理しようとしてマルクスは「経済学的諸範疇を，歴史的にそれらが規定的な範疇であったその順序でならべるということは，実行できないことであり，また誤りであろう。むしろ，それらの序列は，それらが近代ブルジョア社会で相互にたいしてもつ関係によって規定されているのであって，この関係は，その自然のままの順序として現われるもの，また歴史的発展の系列に相応するものとは，まったく反対である。」[32]「これらの単純な諸範疇はまた，具体的な諸範疇以前に，独立の歴史的または自然的実存をもたないかどうか」は，「時とばあいによる」[33]のであって，「諸範疇は，この一定の社会の，この主体の定在諸形態，実存諸規定を，しばしばただその個々の側面だけを表現しているということ，だから近代ブルジョア社会は科学のうえでもまた，そのままのものとしての近代ブルジョア社会が問題となるところではじめてはじまるものではけっしてない，ということ」[34]を強調するのである。

この観点にしたがうならば「経済学的範疇」について「問題なのは近代ブルジョア社会の内部でのそれらの仕組みである」[35]ということになり「近代ブルジョア社会」の内部構造を問題とするかぎり「資本がブルジョア社会のいっさいを支配する経済力」であって，「それは出発点となり，また終結点とならなければならず，そして土地所有に先だって展開されなければならず，両者はそれぞれ特別に考察されたのち，それらの交互関係が考察されなければならない」という，経済学の「篇別についての決定的な手がかり」[36]がえられることになる。そしてこのような経済学体系の「出発点」となり「終結点」となる「資本」を理解するための前提として「交換，分業，価格等々」[37]がおかれることになる。以上のような視点から「序説」での篇別構成は次のように確定されることになった。「(1) 一般的・抽象的諸規定，したがってそ

れらは多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが，それも右に説明した意味である。(2) ブルジョア社会の内部的仕組みをなし，また基本的諸階級が存立する基礎となっている諸範疇。資本，賃労働，土地所有。それら相互の関係。都市と農村。三大社会階級。これら諸階級間の交換。流通。信用制度(私的)。(3) 国家の形態でのブルジョア社会の総括。それ自体との関係での考察。「不生産的」諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。(4) 生産の国際的関係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。(5) 世界市場と恐慌。」[38]

このばあい資本家的「生産の内部的仕組み」[39]を解明する「第2篇」は，当事のマルクスのシェーマでは，ヘーゲルの概念論の内部区分の仕方によりつつ，一般性，特殊性，個別性という序列で構成されることになっていた[40]。ところがそのような「資本」を「出発点」とし「終結点」とする「生産の内部的仕組み」に対し，その前提となる第1篇の「多かれ少なかれすべての社会形態に通ずる」「一般的抽象的諸規定」を具体的にどのような内容で構成すべきかは，まだ方法的に必ずしも明確ではなかった。というのは「ブルジョア社会」の「諸関係を表現する範疇が，その仕組みの理解が，同時に没落しさったすべての社会形態の仕組みと生産関係への洞察を可能にする」根拠は，マルクスによれば「ブルジョア社会がもっとも発展した，またもっとも多様な生産の歴史的組織である」からであるが，より立入っていえば「それは，ブルジョア社会がこれらの社会形態の残片と諸要素とをもってきずかれたものであって，そのうちの部分的にはまだ克服されていない遺物がこの社会のうちに余命をたもっており，ただの予兆にすぎなかったものが完成した意義をもつものにまで発展している，等々だからである。」[41]というのである。

資本家的生産様式の「内的仕組み」分析の前提として，この体系の予備的考察部分として，括りだされた「あらゆる時代に共通する」「もっとも抽象的な諸範疇」は，かくて，資本によって直接包摂されていないあらゆる規定を網らすることになった。商品，貨幣という資本家的生産様式に先行する

単純流通内部での諸規定は勿論のこと，資本の範疇の内部における労働，つまり「譲渡」によって媒介された「他人の労働」や，「労働にたいする関係にしたがって分解された資本の諸要素（生産物，原料，労働用具）」[42] などを排除した「自己の労働の生産物の私的所有」[43] というかぎりでの労働過程や，対象化された労働一般としての生産手段の規定は，すべてこの「抽象的一般的諸規定」の中に組みいれられるのである。つまり「抽象的・一般的諸規定」として商品流通にもとづく流通形態の規定性と，人間労働一般に基礎をおく労働過程の規定性とが，同時にとりあげられることなった。こうして流通形態が，資本の規定から分離されて一般的諸規定としてとり扱われるとともに，生産過程は資本の生産過程から分離されて，むしろ商品形態の前提としておかれることになる。

単純な生産過程（或いは生産過程一般）——生産物交換としての商品規定——貨幣——資本，という『綱要』の段階における一連のシェーマはこうして確立された。次の章句はそのような「資本」の章に先行する「一般的抽象的諸規定」の章（これはマルクスにより「交換価値，貨幣，価格が考察されるこの第1篇」[44] とか，「生産一般にかんする」「第1篇」[45] とかいわれているものである）の中で，どのような順序をもってこれらの「簡単な諸範疇」が配列されるべきであるかをしめしている。

「流通に前提されているものは，一定の労働時間の実現であり，またそうしたものとして価値であるところの商品（特殊的形態にある商品であろうと，貨幣という一般的形態にある商品であろうと）である。したがってその前提は，労働による商品の生産であるとともに，交換価値としてのそれの生産でもある。このことは流通の出発点であり，また流通はそれ自身の運動によって，その結果としての交換価値を創造する生産にたちかえる。したがってわれわれはふたたび出発点に，すなわち交換価値を措定し，創造する生産に到達するのであるが，しかしこんどは，生産が流通を発展した契機として前提し，そして流通を措定するところの，またたえず流通から自分自身にたちかえってはふたたび流通を措定するところのたえざる過程として現われるというふうに

なる。」[46]「交換価値は，本来その内容からすれば，対象化された労働もしくは労働時間の量であって，そうしたものとして，それは流通を通じてその客体化の道をすすんで，貨幣，一見明瞭な貨幣としての実在にまで達したのである。いまや交換価値は，ふたたびみずから流通の出発点を措定しなければならぬが，この出発点は，流通の外にあってその前提となっていたのであり，また出発点にとっては，流通自体は，外からこの交換価値をとらえて，その内部でこれを変形させる運動として現われていたのであって，すなわちそのような出発点たる労働を措定しなければならぬ。」[47]「価値にさきだって出発点として措定された労働過程——これはその抽象性，純粋な素材性のために，あらゆる生産形態にひとしく固有である——は，ふたたび資本の内部にあって，資本の素材の内部で進行し，その内容を構成する一つの過程として現われる。」[48]

資本家的生産様式，したがって資本の生産過程，に基礎づけられない，生産と流通との「一般的，抽象的諸規定」をこのような配列において考察し「資本の章」の前提となる範疇を総括するという構成は，この『綱要』のプランで原型を与えられつつ，『経済学批判』でより精密化され，『資本論』まで維持されつづけたといってよい。『資本論』において「貨幣の資本への転化」の前提として展開されている「商品と貨幣」の篇はまさに，この生産と流通の「一般的抽象的諸規定」の整理された結果であった。

1) 『綱要』155-6頁。
2) 『綱要』165頁。
3) 『綱要』134頁。
4) 『綱要』134頁。
5) 『綱要』136頁。
6) 『綱要』136頁。
7) 『綱要』134頁。
8) 『綱要』167頁。
9) 『綱要』167頁。
10) 『綱要』166頁。
11) 『綱要』159頁。

12) 『綱要』137 頁。
13) 『綱要』136 頁。
14) 『綱要』133 頁。
15) 『綱要』172 頁。
16) 『綱要』167 頁。
17) 『綱要』180 頁。
18) 『綱要』183 頁。
19) 『綱要』204 頁。
20) 『綱要』204 頁。
21) 『綱要』204 頁。
22) 『綱要』168 頁。
23) 『綱要』167 頁。
24) 『綱要』164 頁。
25) 『綱要』166 頁。
26) 『綱要』166 頁。
27) 『綱要』217 頁。
28) 『綱要』217 頁。
29) 『綱要』23 頁。
30) 『綱要』23–4 頁。
31) 『綱要』25 頁。
31) 『綱要』28 頁。
32) 『綱要』28 頁。
33) 『綱要』22 頁。
34) 『綱要』26–7 頁。
35) 『綱要』28 頁。
36) 『綱要』27 頁。
37) 『綱要』21 頁。
38) 『綱要』28–9 頁。
39) 『綱要』139 頁。
40) 『綱要』186–7 頁。
41) 『綱要』25–6 頁。
42) 『綱要』186 頁。
43) 『綱要』148 頁。
44) 『綱要』138 頁。
45) 『綱要』226 頁。
46) 『綱要』166–7 頁。

47) 『綱要』174頁。
48) 『綱要』211-2頁。

3

「資本の章」にさきだつ「一般的，抽象的諸規定」の端初において，「あらゆる生産過程にひとしく固有である」「労働過程」を設定し，その成果としての「生産物が商品になる。商品が交換価値になる。商品の交換価値が商品とならんで特殊的存在をうけとる」[1]という展開において，流通形態の発展をとく『綱要』の方法は，『経済学批判草稿』，『批判』，『資本論』とマルクスの論稿が整理され，「一般的，抽象的諸規定」の端初が「価値」と変り，さらに「商品」として確定されるにつれて，それらの規定の背後に，いわば形態規定を支える実体規定として「労働過程」を潜入せしめる方法として継承されていったのである。

「資本家的生産様式の支配的に行なわれる社会の富」の「原基形態」[2]という観点から，分析の対象としてとりあげられた『資本論』冒頭の「商品」は，その生産過程乃至生産関係にかんしてはなんらふれられていない。しかし，その商品の価値の実体を「抽象的・人間的労働」として検出してくるマルクスの方法の背後には，「商品世界の諸価値で表示される社会の総労働力は無数の個人的諸労働力から成立っているとはいえ，このばあいには一個同一の人間的労働力としての意義をも」[3]ち，「相異なる種類の諸使用価値または諸商品体の総体のうちに，同じように多様な門，科，属，種，亜種，変種を異にする有用的労働の一総体――一の社会的分業――が現象する」[4]という規定がおかれていた。このことはとりもなおさず，マルクスのいわゆる「蒸溜法」による価値実体の論証にあっては，社会の総労働が，すべて単純労働として，社会の総需要に対応する生産諸部門にそれぞれ妥当な量で配分され，生産力や需要の変動に応じて直ちに，その労働の配分を変動せしめる機構が成立していることを前提していることを意味する。このような生産過程を内包する社会は，勿論機械制大工業と労働者の無産労働者化を基底とす

る資本家的生産様式においてしか求めることはできない。

たしかに一般にいかなる社会も基本的にはその保持する労働力を，社会構成員の総需要にたいして適合的に配分せざるをえないという経済原則を，何らかのかたちで達成しなくてはならぬ。しかしその場合資本家社会以前においては，それは，政治的な力，伝統的な権威，または共同体的規制その他諸々の上部構造の力によって行なわれる多かれ少なかれ手工業的な「活動の限定性」[5]を有する緩慢な修正過程であって，経済過程それ自体による自律的な調整作用としての資本家的生産様式の「労働一般」[6]の成立とは異なるのである。

ところがマルクスにあっては「あらゆる生産形態にひとしく固有である労働過程」を「商品世界」の背後に想定し，いわば経済諸原則によって，商品間の価値関係が規制されるものとして処理してしまうため，商品の分析それ自体からは単に異なった使用価値の商品の対立が導きだされるにすぎないにも拘わらず，この使用価値の相違を捨象した「価値の大いさに関連しては，それがすでに質のどんづまりたる人間的労働に還元され」[7]るものと考えざるをえないことになる。しかしこの「商品と貨幣」の篇の考察範囲は「単純流通あるいは商品交換の部面」[8]に局限されるのであって，資本と労働力の対立関係から抽象された領域である。そこへマルクスはこのような「あらゆる生産形態にひとしく固有である労働過程」を商品の生産過程と想定し，したがって各商品に対象化された労働を，「商品世界」を形成する社会的総労働の一可除部分として把握し，しかもこの生産過程が特定の階級関係に支配されていないものとしながら，この「抽象的人間的労働」による価値規制を，「商品流通の内在的法則」として定式化するにいたったのである。これは単純流通の内部においては，さらに単純流通の「領有法則」として定式化され，「ここでは所有もまた労働による労働の生産物の領有として，また自己の労働の生産物が他人の労働によって買われるかぎりでは，自己の労働による他人の労働の生産物の領有として措定されている。他人の労働の所有は自己の労働という等価物によって媒介されている。所有のこの形態は――自由および平

等とまったく同様に――，この単純な関係のうちに措定されている。」[9] ものとして，「資本家的領有法則」への「転化」が次のようにとかれることになる。「交換価値がさらに発展すればこのことは転化され，そして結局，自己の労働の生産物の私的所有は，労働と所有との分離に同じであること，その結果，労働は他人の所有をつくりだすにひとしく，所有は他人の労働を支配するにひとしくなることがわかる。」[10]

『資本論』でもこの論理はうけつがれて，労働力の商品化による資本家と労働者の新らたな交換関係の成立をとおして「商品生産および商品流通にもとづく取得法則または私的所有法則は，それ独自の・内的な・不可避的な・弁証法によって，その正反対物に転変する。本源的操作として現われた等価物同志の交換は，一変して，仮象的にのみ交換されるようになる。」[11] ことを強調している。つまりマルクスにおいては「商品流通の内在的法則」は，たんに流通関係を規制する商品交換の法則にとどまらず，その背後において「自立的な，そして相互に独立的な，私的労働の生産物」を交換しあう成員によって構成された「社会的分業」をともなう「一つの多岐なる体制」[12] の内的関係を規制する法則として把握されているのである。このような「あらゆる生産形態に固有である労働過程」と商品交換一般とを結びつけて「価値法則」の支配する体制として，資本家的生産様式と対比せしめるならば「価値法則による価格および価格運動の支配は別として，商品の価値を理論的にのみならず歴史的にも生産価格の先行者と看なすことは，まったく事態適応的である。このことは，生産手段が労働者に属するような状態に妥当するのであって，こうした状態は，古代世界でも近代世界でも，みずから労働する土地所有農民の場合，および手工業者の場合に見られる」[13] として，生産手段を各労働者が所有して「自由かつ平等」に相互にその労働生産物を交換しあう，いわゆる「単純商品生産者」の社会を想定せざるをえないことになるであろう。

歴史的対応はかくして「商品生産がそれ自身の内在的諸法則にしたがって資本家的生産に発達するのと同じ程度で，商品生産の所有法則が資本家的取得の法則に転変する」[14] ということになる。

このように「商品流通の内在法則」と対応する「労働による労働生産物の領有」法則と，資本家的生産と対応する「労働が他人の所有をつくりだす」ところの資本家的領有法則との対立を前提とし，前者から後者への「転化」の過程を解明することが，われわれが問題としてきた『資本論』第1巻第2篇「貨幣の資本への転化」の内容をなすことになったのである。「単純な商品流通」の「内在的諸法則」をこのように，じっさいにはたんに流通にかんするだけではなく，「自由かつ平等」な「単純商品生産者」によって構成された「体制」における「ほぼ相互的欲望に照応する比率的分量で生産された」[15]商品の価値関係を規制する法則として理解するならば，この「単純な商品流通の内現的諸法則」から G–W–G' の形式が一般的に成立することはありえないであろう。「いくらもがいても結果は同じである。等価物同志が交換されるならば剰余価値は生じない。」[16]のである。

「商品流通の最後の産物」たる「貨幣」を「資本の最初の現象形態」として，この「貨幣」から「資本への転化」乃至「生成」をとく視角は，かくて「商品流通の内在的法則」そのものによって完全に封殺されて，G–W–G 形式を無媒介に前提しつつ，「それの使用価値そのものが価値の源泉であるという独自の性状を有する商品」「労働力」を導入して，一挙に産業資本の形式を完成させる論理構造へときりかえられることになった。『資本論』における「貨幣の資本への転化」の論理はこのようなものとして把握さるべきであろう。

1) 『綱要』82頁。
2) 『資』第1巻39頁。青木文庫版 (1) 113頁。
3) 『資』第1巻43頁。(1) 120頁。
4) 『資』第1巻46頁。(1) 124頁。
5) 『綱要』24頁。
6) 『綱要』24頁。
7) 『資』第1巻50頁。(1) 129頁。
8) 『資』第1巻184頁。(2) 328頁。
9) 『綱要』148頁。

10) 『綱要』148頁。
11) 『資』第1巻612頁。(4) 909頁。
12) 『資』第1巻46-7頁。(1) 124-5頁。
13) 『資』第3巻202頁。(9) 266頁。
14) 『資』第1巻616頁。(4) 914-5頁。
15) 『資』第3巻203頁。(9) 267頁。
16) 『資』第1巻171-2頁。(2) 309頁。
17) 『資』第1巻174頁。(2) 315頁。

む す び

『資本論』第1巻，第1篇「商品と貨幣」の規定の基盤をなす社会「体制」は，本来は，一般に考えられているように，いわゆる「単純商品生産者」の社会を想定して構成されたものではなかった。それはあきらかに「資本家的生産様式」の「富の原基形態」として抽象された「商品」であり「貨幣」であった。このような単純な範疇といえども「歴史的には，社会のもっとも発展した状態にならなければ，その強い発展をもっては現われない」ことを，したがってこのような単純な範疇は，まさにその抽象性のゆえに「内包的にも外延的にも完全に発展した形」[1]において把握するためには，発展した資本家社会を前提とするものであることをマルクスは充分承知していた。ところがこのような資本家的生産様式の「内部構造」を分析するための前提としての「一般的抽象的諸規定」を，発展した資本家社会から抽象して「資本の章」に先行せしめる場合，マルクスはたんに流通形態における「単純な範疇」ばかりでなく，生産過程における抽象的規定を「生産一般」「労働一般」として併存せしめ，このような「生産一般」によって，商品価値の規定を実体的に基礎づけるという操作を逐行した。生産価格の支配する資本家社会にたいして，「労働者に生産手段が属する状態」を「歴史的」に価値の支配する社会として対置させる論理は，このような方法によってもたらされた結果であった。

勿論こうなれば「価値法則は完全に発展するには，大工業生産と自由競

争との社会，つまり近代ブルジョア社会を前提する」ものであるにもかかわらず，「原始時代の漁夫と猟師とをいきなり商品所有者として，魚と獣とをそれらの交換価値に対象化された労働時間に比例して交換させ」[2] たリカードに対する批判が，マルクス自身にも多かれ少なかれあてはまることになるであろう。つまり「資本の章」の前提として，「流通形態」から抽象された「簡単な範疇」に対して，「生産過程」から抽象された「生産一般」を組みあわせることにより，実質的には「単純商品生産者」の「体制」が構成され，「貨幣の資本への転化」，G–W–G' 形式の導出は，その意向にもかかわらず，絶対に成立しえない論理構造がもたらされる。ここにおいてマルクスは，貨幣から資本への形態的展開の道を封ずるというかれの意図せざる論理的帰結と，しかしそれにもかかわらず現実的には成立している価値増殖過程を説明しなくてはならぬ必要とから，G–W–G 形式を W–G–W 形式に対立させていきなりもちこんでくるという非論理的操作を逐行せざるをえなくなった。古典経済学における根本的欠陥として価値形態の分析の欠除を批判したマルクスにとって，これはまさに不測の事態であったといってよいであろう。

資本家的再生産過程の構造を，価値形態の規定の展開をとおして論理的に解明するという作業は，かくしてその第1篇をなす「一般的抽象的規定」を，「流通」形態と「生産」過程からそれぞれ独立に導きだして，資本家的生産の前提としてこれを結合させておくという方法を拒否するものである。つまり「生産過程」から抽象して「生産一般」を規定するのは，実は資本形態の内部に包摂された生産過程として以外にはなしえず，「流通形態」はむしろ，生産過程をたとえ「生産一般」としてでも前提することなく，それ自体において規定されねばならねばならぬのである。このような「流通」と「生産」との構造的関連のあり方は，産業資本成立の前提として商人資本の支配する本源的蓄積の段階を必要とする資本家的生産様式の歴史的生成過程によって現実的に規定されているのであって，資本家的生産様式の内的構造の理論的究明も，このような対象の現実的歴史的生成過程自体のしめす具体的関連のあり方にもとづいてはたされねばならぬのである。

1) 『綱要』24頁。

2) 『批判』岩波文庫版69頁。